熊本大学教育学部紀要，人文科学
第44号，47—64，

芳澤喜久の「市民科」構想

── 東京女高師附小における「社会科」実践の研究(3) ──

河　南　　一

A Conception of "Civics" by Yoshizawa Yoshihisa

──"Social Studies" at the Attached Primary School of Tokyo Women's Higher Teachers College(3) ──

Hajime KAWAMINAMI

(Received September 4, 1995)

はじめに

東京女子高等師範学校附属小学校（以下，附小と略記する）において，教育課程の実験的な試みが開始されたのは，【表1】に掲げた略年表に見られるように，1918年のことであった．その際には，第一部（女児のみで編成され，無試験で附属高等女学校へ進学する学級）だけではあったが，低学年と高学年に新しい教科が設置されている．すなわち，1学年から3学年までの学年に新設された週2時間の「直観科」と5•6学年の「英語」である．そして，1920年に北澤種一が附属小学校主事に就任するとこうした実験的な試みが拡大され，「従来の第三部を根本的に改造して実験学級」として編成し「作業学校の思潮に基づく新教育」が実施されることになったのである[1]．さらに1925年になると，低学年教育研究部が新設され「作業主義に基づく全体教育」が実施されることになった．そしてこの時から「一部，二部，三部を通じて従来の時間割」は廃止され，直観科は3学年のみの教科として存続することになったのである[2]．

さて，25年から開始された同校の「低学年全体教育」は，当時の教育界において，奈良女子高等師範学校附属小学校の合科学習と並んで「生活教育の実践事例」として注目されているが，25

表1　女高師附小略年表

1918年	第一部に「直観科」を新設
1919年3月	主事藤井利誉が欧米留学より帰国
11月	幼学年教育の研究委員会が発足
1920年4月	北澤種一が主事に就任し、第三部を改造して作業教育の実験的教育に着手
1921年4月	堀七蔵が附属高女へ転出、芳澤喜久が赴任し第三部直観科を担当
1922年11月	主事北澤が欧米留学へ出発（堀が主事代理に就任）
1924年12月	北澤が帰国（堀は附属幼稚園主事へ転出）
1925年4月	低学年教育研究部を新設し、時間割を廃止した作業主義全体教育を開始
1928年4月	第三部4学年に「郷土科」を新設
1929年4月	第一部4学年に「社会科」を新設

年以前の直観科実践と構想については，「新教育の準備期・実験段階」と位置づけられているだけであり[3]，その実体はほとんど検討されていない．

そこで本論文においては，1925年以前の直観科実践を明らかにするために，21年に同校の訓導として赴任し，第三部の直観科を担当した芳澤喜久の思索過程を手がかりに検討する．すなわち，彼は如何なる人物であり，直観科をどう構想していたのか，そして直観科を如何なるカリキュラム構想のもとに位置づけようとしていたのか，という問題である．

一　芳澤喜久の経歴

芳澤喜久については，吉田弘が「芳澤喜久君の長逝を悼む」と題する追悼文のなかで，その経歴を簡単に紹介している[4]．そこには，1895年に長野県諏訪郡原村に生まれ旧制諏訪中学を卒業したこと，そして玉川小学校・立澤小学校に勤務した後，東京高等師範学校に入学し，同校を卒業した1921年に附属小学校へ赴任したこと，さらに1925年5月から慶応病院に入院療養し，同年11月に31才の若さで死去したことが紹介されている．したがって芳澤が同校で実質的に活動した期間は，わずか4年間に過ぎないことになる．なお吉田は，芳澤が『児童教育』だけでなく雑誌『地理教育』の創刊と編集にも携わったこと，『自然と直観』『自然界の話』『動物の観察』『生き物の話』などの著書があったことも紹介している．

同校の機関誌であった『児童教育』を調べた場合，各訓導の経歴はほとんど紹介されておらず，例外は在職中に死去した北澤と芳澤の二名だけである．そこで，この吉田の追悼文を手がかりに調査したところ，次のような人物であることが明らかになった．

1）芳澤喜久の略歴

下に掲げた【資料1】は，長野県諏訪郡原村中新田に建立されている芳澤の墓碑に記された略歴である．

【資料1】芳澤喜久の墓碑銘
乾秀院喜圓良久居士（正面）
芳澤喜久明治二十八年七月十七日生於諏訪
郡原村中新田宅蔵之長子也明治四十三年四月入
長野縣立諏訪中学校大正四年三月卒業仝年
四月拝命仝郡本郷村立澤尋常高等小学校代
用教員五年四月拝命仝郡玉川尋常高等小学
校代用教員六年四月入東京高等師範学校専
攻博物学十年三月卒業仝四月任東京女子高
等師範学校訓導大正十四年十一月二十三日
歿矣行年三十一歳（側面左）
昭和十二年十月芳澤勇建之（背面）

芳澤喜久は，1895年（明治28）に長野県諏訪郡原村808番地（中新田）に生まれ，1902年（明治35）に原尋常高等小学校中新田分教場に入学した後，1906年3月に同校を卒業している[5]．そして，1910年（明治43）に旧制諏訪中学校（現在の諏訪清陵高等学校）に入学し，1915年（大正4）3月に同校を卒業している[6]．

諏訪中学を卒業した後，彼が代用教員として勤務したのは，立澤小学校（諏訪郡富士見町立澤

にあり，現在の校名は本郷小学校）と玉川小学校（茅野市玉川）であり，それぞれ一年間だけであった[7]．立澤小学校に勤務した頃の様子を記憶されていた村の古老によれば，彼は中新田から立澤まで徒歩で通勤し，雨の日には簑笠をつけて通ったこと，そして夏休みには子どもたちが中新田の自宅を訪問したこともあったらしい．こうした当時の状況から，芳澤が初めて教師となった小規模な学校で，児童たちの教育に熱心に携わったことが推測できる．一方玉川小学校は，立澤小に比べて比較的大規模な学校であり[8]，しかも白樺派の影響を受けた当時の諏訪教育界における拠点校の一つでもあった[9]．例えば同校には，歌人の島木赤彦が明治33年から37年3月まで訓導として勤務しており，さらに明治44年には校長として再度赴任している[10]．また，芳澤の離任後の大正6年10月23日には，玉川同窓会が中心となって島崎藤村を招聘し，講演会が開催されている[11]．

芳澤家の長男として生まれた喜久が生家の家督を三男の実雄に譲り，教育者としての道を歩むようになった最大の原因は，こうした二年間の代用教員生活にあったと思われる．すなわち，立澤小における児童との出会い，そして玉川小における大正新教育との出会いである．

大正新教育の息吹に触れたことによって，教育への道を本格的に志した芳澤は，東京高等師範学校に入学し，地理博物を専攻する[12]．そして彼は，同校を卒業した1921年(大正10)に東京女子高等師範学校附属小学校訓導として赴任したのである．なお在職中に彼が出版した唯一の著作『自然と直観』(中興館，1923年)は，喜久の実弟である小林繁治氏によって大切に保管されていた[13]．赴任当初，学校近くの湯島に下宿していた彼は，1923年4月に結婚し中野へ転居している．そして芳澤は，『児童教育』の1925年1月号に掲載された「新春雑感」の中に，「この年越しは三人，昨年は二人，一昨年は一人！　それが自分の一生にとって特筆すべきことがらである．旭日の輝きを三つの生命が仰ぎ見る時に言い得ぬ歓喜が心の奥底から湧き出ることであろう」[14]という，希望に満ちあふれた一文を残している．

こうした彼の経歴を見た場合，建立された墓碑は教育への志を立てながら道半ばにして急逝した芳澤喜久を偲ぶものであり，そして墓碑に経歴を記載することで，彼の存在を記録したいという親族の意図があったと思われる．なお，墓碑が建立された昭和12年は，残された芳澤の子息勇氏が旧制諏訪中学に入学された年でもあった[15]．

2）附小における芳澤の研究活動

次ページに掲げた【表2】は芳澤喜久が発表した論文題目の一覧表である（なお雑誌名が記載されていないものは，すべて『児童教育』に掲載された論文であり，数値はその巻号を示す）．この表から，彼の研究活動の概要を次のように読みとることが出来る．

まず第1点目は，同校に赴任した直後の1921年6月号から入院した25年5月号まで，芳澤が毎号のように論文を発表していることである．毎日の授業だけでなく，8月に開催される研究大会の準備や3月に行われる教育実習生の指導なども考えた場合，『児童教育』へ投稿するだけでなくその編集にも携わることは，多大な労力を必要としたと思われる．

第2点目は，論文題目から判断して，彼の研究活動が4つの領域に分類できることである．

第1の領域は，「二葉生」というペンネームで発表されている随筆関係のものであり，「自然界と我」「黒百合をたづねて」のように，おもに連載形式で発表されている．こうした随筆には，他校への学事視察などの旅行記や身辺雑記などが記載されており，彼の日常生活の様子を読みとることができる．

第2の領域は，直観科関係のものである．この領域は，「[08] 直観の意義と其の実際」という

表2 発表された論文リスト

年	月	番号	発表名 論文題目（巻号）
1921	6	[01]	二葉生「ピットマンの商業地理に現れたる日本」15-9
	7	[02]	芳澤喜久「自己活動の休暇」15-10
		[03]	二葉生「自然界の我（一）」15-10
	8	[04]	芳澤喜久「地理学の若返り」15-11
		[05]	二葉生「自然と我（二）」15-11
	9	[06]	喜久生「団扇状の日本地理」15-12
		[07]	芳澤生「米国に於ける市民学」15-12
		[08]	芳澤喜久「直観の意義と其の実際」15-12
		[09]	二葉生「自然界と我（三）」15-12
	10	[10]	二葉生「自然界と我（四）」15-13
	11	[11]	二葉生「自然と我（其の五）」16-1
1922	1	[12]	芳澤喜久「シビックスと郷土地理」16-3
		[13]	二葉生「自然と我（六）」16-3
	2	[14]	芳澤喜久「地理といふ学科」16-4
		[15]	二葉生「自然と我（七）」16-4
	3	[16]	二葉生「ボルシェウィキ、ロシアに於ける教育」16-5
	4	[17]	二葉生「自然界と我」16-6
	5	[18]	二葉生「幼稚園に於ける団体生活のプロジェクト」16-7
	6	[19]	芳澤喜久「市民教育に対する私見」16-8
	7	[20]	芳澤喜久「児童の休暇」16-9
	8	[21]	芳澤喜久「自然の児をみつめて」16-10
		[22]	二葉生「雲の形と名称」16-10
	10	[23]	芳澤喜久「教へ過ぎた教育」16-12
		[24]	二葉生「黒百合を訪ねて（一）」16-12
	11	[25]	芳澤喜久「地理教授五十年の回顧と将来」17-1
1923	1	[26]	芳澤喜久「直観の審美的価値」17-3
		[27]	二葉生「黒百合をたづねて（二）」17-3
	2	[28]	芳澤喜久「直観教授の実際」17-4
	3	[29]	二葉生「黒百合をたづねて（三）」17-5
	4	[30]	二葉生「黒百合をたづねて（四）」17-6
	5	[31]	芳澤喜久『自然と直観』中興館
	6	[32]	芳澤喜久「気候教授の参考までに（一）」17-8
	7	[33]	芳澤喜久「気候教授の参考までに（二）」17-9
	8	[34]	芳澤喜久「気候教授の参考までに（三）」17-10
	9	[35]	芳澤喜久「気候教授の参考までに（四）」17-11
	11	[36]	芳澤喜久「我が国の地震地帯について」18-1

1924	1	[37]	二 葉 生「震災予感」18-3
	3	[38]	芳澤喜久「尋常一年の直観教授」18-5
	4	[39]	芳澤喜久「地理の要素」18-6
	5	[40]	芳澤喜久「各科教授の実際・大豆の直観」18-7
	6	[41]	芳澤喜久「新しい地理書付図の使ひ方」18-8
		[42]	芳澤喜久「直観教授の実際・天気の直観」18-8
	7	[43]	芳澤喜久「直観教授の実際（尋三）」18-9
	9	[44]	芳澤喜久「模倣と創造」18-11
	10	[45]	芳澤喜久「水の有り難さ」18-12
		[46]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理教材(一)」『地理教育』1-1
	11	[47]	芳澤喜久「地理科の本質」18-13
		[48]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(二)」『地理教育』1-2
	12	[49]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(三)『地理教育』1-3
1925	1	[50]	二 葉 生「新春所感」19-1
		[51]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(四)」『地理教育』1-4
	2	[52]	芳澤喜久「ホーム・ジオグラフィーとは」19-2
		[53]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(五)」『地理教育』1-5
	3	[54]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(六)」『地理教育』1-6
	4	[55]	芳澤喜久「修正尋常小学地理書（巻一）を見て」19-4
	5	[56]	芳澤喜久「地理教授の一試案」19-5
		[57]	芳澤喜久「教授の実際・生物教材の演習」19-5
		[58]	芳澤喜久「国語読本に現れたる地理上の教材(七)」『地理教育』2-2

題名に端的に見られるように，彼が附小で担当した直観科の趣旨と実践を記載したものである．そしてこの領域のものが発表論文の中核を占めており，彼の最大の問題関心が低学年の直観科にあったことがわかる．

第3の領域は，地理教育関係のものである．「[04] 地理学の若返り」「[14] 地理といふ学科」といった題名に見られるように，地理学自体に関する問題と地理教育論が中心になっており，実践が含まれないのが特徴である．同校の地理担当者を調べた場合，彼の赴任の前年から斉藤英夫が勤務しており，しかも多くの実践を発表している点から考えて[16]，芳澤は地理を担当していなかったと思われる．なお彼の地理教育への問題関心は，雑誌『地理教育』の発刊と同時に連載された「国語読本に現れたる地理上の教材」にも見ることができる[17]．

第4の領域は，「[07] 米国に於ける市民学」「[19] 市民教育に対する私見」という題名に見られる「市民教育」関係のものである．これらの題名から，彼がアメリカで行われていたシビックスに関心を持っていたことが伺える．

第3点目は，4つの領域の関係である．すなわち「[12] シビックスと郷土地理」という題目から判断できるように，彼が第4領域の「市民教育」を軸として，「地理教育」と「直観科」を捉え直そうとしていたと推測できる．そして重要な点は，こうした4つの領域について，彼がその赴任当初から発表していることである．

では，以上の経歴と研究活動の概要を念頭におきながら，芳澤が発表した論文を検討することにしたい．長野県の諏訪郡において，代用教員として大正新教育の洗礼を受けた芳澤喜久は，どのような構想を抱いて実践していたのであろうか．

二 芳澤喜久の直観科構想

1)『児童教育』に発表された直観科実践

芳澤が『児童教育』に発表している論文のなかで，直観科に関するものは7例であるが，その大部分は簡単な実践報告である[18]．そしてその内容は，「大豆の直観」「天気の直観」という題名に見られるように，理科的な内容となっている．例えば，「[28] 直観教授の実際」のなかで紹介されている「小石拾い」の場合，「河原に行って児童と一緒に自分の好きな石拾いをする（中略）．その拾い集めた石を分類してみる」「角のあるのと丸いのとのあるのは，何うしたわけでしょう? 角のとれたのは何うなったんでしょう? 縞になっているのは何うしてでしょうか? 河原にある石はどこから? 何うして来たんでしょう?」といった簡単な学習活動のみが示されている[19]．こうした報告のあり方とその内容を見る限り，彼の直観科構想は，理科的な内容が中心になっていると把握できる．ただ，「冬の着物」に記述されている「児童の着ている衣類について調べて見る」「如何にして着物にまでなったかについて話してやる」といった部分や，「冬の気候」のなかで「火の必要の所以を考察させ，吾々は火から何れ位の利益を受けているかを感ぜしめたい．尚ほ火の発明以前の人々の生活についての話をして聞かせる」と記述されている部分に，若干の相違点を見いだすことができるだけである．

さて，『児童教育』に発表された論文を見る限り，芳澤の直観科構想は，その全体像が説明されていないだけでなく，理科的な内容が中心であった．この当時，5・6学年に設置されていた理科が4学年に引き下げられており，各学校では理科的な内容をさらに低学年へ下降させる動向があったことを考慮した場合，『児童教育』に発表された芳澤の直観科実践には，それほど特色が見られない．しかしながら，彼の著書である『自然と直観』のなかに，直観科の主旨だけでなく教材編成の視点とその概要までも述べられていることがわかった[20]．そこで，同書によってその概要を明らかにしていきたい．

2) 直観科の構想

芳澤は直観科の主旨について，次のような見解を表明している．すなわち，「初学年の理科教授が直観教授であり，直観科の目的が，日常の事物事象の観念を明瞭にし児童の経験世界を広め兼ねて観察考察の能力を涵養するにありとすれば，その教材と教授者の態度とは自づと決まることである．教材は自然界及び人事界のものであり，その児童の環境をなすモノミナを理屈なしに直観し，漸次研究的態度に導いてやろうとするのが教授者の態度でありたい」[21]という一文である．この文章から，彼が構想していた直観科は，児童が生活している「自然界及び人事界」を考察対象とし，児童を「研究的態度に導く」ことを目指していたことがわかる．また彼が使用している「自然」という言葉は「戸外における物質的存在の全体」「天地間の森羅万象の総称」を意味しており，自然と社会に区分する以前の「モノミナ」であったことがわかる[22]．

さらに彼は，こうした「研究的態度」を育成するためには，「不可思議に対して疑いの眼光を向ける」ことが重要であり，それこそが「自然界研究の最も大切な仕事である」として，その研究

方法を，次に掲げる【資料2】のように述べている．そして小学校においては，「小さき科学者を作ろうとする」ような教育は誤りであって，「生活のための研究」こそが「自然界研究の第一歩」であり，こうした教育を前提としたうえで「更に進んで真理を究めようとする者」だけに「知識のための研究を続行すべきである」と述べている．

【資料2】芳澤喜久の自然界研究の方法

「一，人知を増進せんために，不明不可思議なる自然界中に新しい真理を発見し，吾々の可知の世界を拡大せんとするため，即ち学問のための研究である．

二，自然界に対する同情的態度を養い，人生の喜びを増進せんための研究，即ち生活のための研究である．

前者は即ち科学的態度である．専門家の研究にせよ一般通俗的研究にせよ何れも真理を愛好する人々の態度より生ずる研究の方法である．吾々が自然界の Truth を探究せんとすれば，所謂発明発見家又は研究家とならねばならない．

後者は自然愛好家の態度である．詩人・歌人・画家・音楽家等のとれる態度である．自然の美を探らんとする態度である．自然界を賛美せんとする Sympathy の態度である．それ故職業の何たるを問はず，よりよき生活を送らんとする人々の誰もが持ち得る態度である．Richer life を送らんとする人々は何人と雖も自然を愛好せんと志すべきである．」[23]

3）直観科の内容編成

直観科の教材については，芳澤は「自然界中より選択せらるべき主なる教材は，季節によるもの，植物生育状態を知り得るもの，天空の星や月に関するもの，気候と人生との関係，鳥虫等の生物，動植物と人生との関係，その農工業等に直接関係あるもの，自分の身体に関する生理・衛生・栄養等に就いて，如何にすれば自己の健康は増進され社会の幸福は得られるだろうかという様に，凡てよりよき生活への随伴者たり得るものを標準として選ぶべきである」[24]と述べている．そしてこうした視点から導かれた直観科の研究項目について，彼は1学年の事例として「産業的方面」「天気の研究」「生理衛生」の3項目を，2学年では「産業的，地理的方面」「気候」「地質，地形」「天文」「生理衛生」の5項目を，3学年では「産業的方面」「郷土地理」「天気」「天文」「物理化学」「生理衛生」の6項目を，それぞれあげている．

こうした項目構成から判断した場合，「生理衛生」として示されている「自己の身体」を軸として，気候・天文・地形・物理化学などの「自然界」と産業的方面・郷土地理などの「人事界」による構成を考えていたことがわかる．そして彼は，こうした項目に基づいて抽出した内容を季節と学年によって編成し，その「主要なる題材を総括的に掲げ」た「自然界の研究要目」を提示しているが，そのなかで各学年の「産業的方面」として説明されている内容を示すと，次の【資料3】の通りである[25]．

【資料3】直観科における「産業的方面」の題材

〈尋常第1学年〉

「家庭の職業．食物の供給．衣類．住所．衣食住の必要とその発達．如何にして何処から得るか．誰が作ってくれるか，その源を尋ねる．原始人の話．火の話．

農場，園芸場，田畑，商店等の見学．衣食の材料に関して考察する．」

〈尋常第2学年〉

「着ること：材料．如何なる動物から得るか．如何に準備されるか．家は何うして造るか．材料は何．原始人との比較．

火 ── 如何にしてつけるか．使い方．原始的方法．

動物 ── 馴致．種類．用途 ── 皮革，肉，乳．駄獣等．遊牧の民．

旅行の仕方 ── 自然的地形によって決定される道路．商品の運搬と交通．都会と田舎との生活．

その利点と愉快な点とをあげる．他国の児童．気候の概念と地理的見方．」

〈尋常第3学年〉

(一)産業的方面

「衣食住の必要とその材料及び源泉．機業について．野蛮人の生活．分業と通商．有無相通ずること．狩猟と漁業．家畜・家禽．耕作の起こり．農業と人生．農夫の利源．相互扶助．都会生活．店・工場・運搬・交通・光燈等．田舎と都会との関係．商業．気候・産物・生活法等は場所によって一様でないこと．

(二)郷土地理に関して

土地と水の変態．学校内の排水．小川の研究．浸蝕・沈殿・堆積・瀧・急湍．川の合流．川の効用．川岸と谷．交通路と住所．岩石の風化作用と土壌．耕作の必要．

地下水，湧水，井戸（飲用水）．都会地の飲料水の供給．沈殿物の濾過と浄水池．

石炭――産地．家庭，機関，工場，鍛冶屋にて用いる．石炭坑の話．坑夫の生活．石炭瓦斯とその不用物の利用．

普通の金属――教室内を調べて見て金属の使ってある場所，その用途を研究させる．記載せる金属の区別，その弾性，硬度等の比較実験．これ等金属の発見されざる昔人の生活（石器時代）．家庭でも調査させる．名称と用途．食塩及びその製法．」

この【資料3】を見た場合，各「項目」の説明が十分な形で文章化されていないことに気づく．それは，出版に際して次のような事情が突発したからであった．すなわち「付言」によれば，執筆が開始されたのは1922年の9月頃であり，彼は12月27日に脱稿し原稿を「印刷所に引き渡し」ている．そして早急に出版するために，年内に二・三回の校正を終えた後，正月の休暇を利用して諏訪に帰省し，1月7日に帰京したところ，4日に印刷所から出火して「原稿全部焼失」という葉書を発見したのである．「初めて書物を書いて，こうした目にあったのだから途方に暮れてしまった」芳澤がようやく気を取り直し，再度原稿を執筆し始めたのは2月11日であり，「悲喜交々至り，東奔西走，不眠不休」で原稿を再度作成し終えたのが，4月11日のことであった．

以上述べてきたように，芳澤が『自然と直観』に掲載していた直観科構想は，理科的な内容だけでなく，人事界の内容を大幅に組み込んだものであった．しかもそこでは，児童の「身体」を軸として，児童が生活している「自然界」と「人事界」を対象とするという内容編成の視点だけでなく，具体的な教材例も提示されていたのである．こうした芳澤の直観科構想は，当時構想されていた理科的な内容の下降を中心とした直観科と比較した場合，社会認識教育を目指した優れた内容編成原理を提示したものであったといえよう．

では芳澤喜久は，なぜ直観科のなかに「産業的方面」「郷土地理」などの内容を大幅に組み込んだのであろうか．そして，こうした「人事界の内容」を含んだ直観科は，如何なる教科構想のもとで検討されていたのであろうか．

三 「市民科」を軸とした教科構想

芳澤喜久の附小における在籍期間は極端に短いため，彼が直観科を如何なる教科編成のもとで構想していたかという点については，残念ながらまとまった論文は残されていない．しかしながら第一節で指摘したように，彼が発表した論文のなかには，断片的にではあるが，「市民教育」を軸とした地理教育に関する構想が説明されていた．そこで，彼の直観科構想の基盤となっていたと思われる教科構想を検討するとともに，その構想が附小においてどう継承されたかを考えてみ

たい.

1)「市民科」を軸とした教科構想

彼は，当時実践されていた郷土地理が「単に神社，仏閣，官公衙，名所，旧跡，交通線，物産，山川等の名称及びその所在，分布等をその個々のものについて排列的に部分的に教授したもの」であり，「地理学の基礎にも何もなったものではない」と批判し，「郷土という狭い範囲を出発点として社会的生活をなす基礎を作る」とともに，「自他の関係を明にし社会的一員たるのことを自覚せしむる」ことを目指した郷土地理へと再編成することを提案している．この構想は「小さい団体より次第に大なる集団，墜には社会国家の一員として完全なる生活を送ることの出来る様に児童を導かんとする学問」である「シビックス」の理念を郷土地理に導入したものであり，それが彼の「郷土科」の意味内容であった[26]．そしてこの「シビックに基づいた郷土科」を軸として，低学年には「ネーチュアースタディーを採り入れた」直観科を設置し，そして高学年には地理科を位置づけるといった教育課程を構想していたと思われる．なおこの構想を整理すると，下の【表3】のようになる．

では，当時実践されていた郷土地理を批判した芳澤は，なぜ「シビックス」に基づいた教科構想を考えたのであろうか．こうした問題を設定した場合，その根底に次の二つの理由をあげることができる．

第1点目は，教育学に関する問題である．彼は，当時の教育学が「人格教育なる個人（即ち社会から切り離したる一個の人間）の教育に偏して」いると批判し，「社会の一員としての個人を対象」とすべきことを主張する．なぜならば「吾人は社会を離れて寸時も生活をできない時代」となっており，「Socius としての自覚を熱望する時代が到来している」という時代認識を抱いていたからである．そしてその状況を打開するためには，「欧米にて所謂 Civics 即ち市民科，公民科」を導入することが「目下の本邦教育界に最も必要なる仕事」であると考えていた．したがって市民教育という観点から，時代状況の変化に対応しきれない「百年一日の如き学科課程表」で運営されている授業を再構築する，といった構想を抱いていたことがわかる[27]．

第2点目は，地理学に関する問題である．彼は，地理学を「幾千年の歴史を有する人類が如何に自然の力に支配されて来たか？　またその間に如何に自然を征服したか？　将来如何なる方法によれば『よりよき生活』を送り得るか？　を研究する」学問であると考えていた[28]．それ故に，シビックスに基づく郷土地理の目的は「社会的事実を知ると同時に，自己との関係を明らかにする」ことであり，そのことが「社会生活の真義を知る」ことになると述べている[29]．さらに，「実生活を離れて高遠なる地理的理法」や体系的な知識を教授するのではなく，「児童自身の日常生活を地理的に説明」することによって初めて「地理教授の基礎観念が養われる」のであり，「生活即学問

表3　芳澤喜久の「市民科」構想

1～3学年	4学年	5・6学年
直観科	郷土科	地理
		国史
	理　科	

という思想を児童に持たしむる」ことによって「学究的態度」を育成することが地理教育であると考えていた[30]．こうした断片的な見解ではあるが，そのなかに，彼が模索していた地理教育の構想を読みとることが出来よう．

以上検討してきたように，断片的知識の教授に陥っていた郷土地理実践を批判した芳澤喜久は，「シビックスとネーチュアースタディー」を導入することによって，研究的態度の育成を中心とした教科へと再編成する構想を抱いていた．それこそが市民教育を目指した直観科・郷土科・地理科の構想であり，彼のいう「市民科」とは4学年までに設置された直観科と郷土地理の総称であったと思われる．しかもこの構想は，附小の「合科学習」を取り上げた当時の教育学研究でさえも「今日の全体教育主義の前段階をなすもの」[31]と評価された時期に着想されていたのである．しかしながらこの構想は，彼が死去したことによりまとまった形で発表されることなく，「未完の構想」に終わったのではあるまいか．なお，彼が『児童教育』誌に発表した各論文を調べたとき，こうした暫定的な構想試案に基づいて，まず担当していた低学年の直観科実践を通して直観科構想と教材編成のあり方を実証的に明らかにし，次いで郷土科と地理科の実践に基づいて，市民教育構想の具体化と総合化を目指すのが，彼の研究方法論であったと思われる．

では，こうした芳澤の「市民科」を軸とした教科構想は，附小における研究活動のなかでどう検討され，そして継承されたのだろうか．もちろん，『児童教育』に掲載された各論文には，この芳澤構想に触れたものはほとんどない．そこで，理科研究部によって発表されている直観科構想を中心に検討してみよう．

2) 附小の直観科構想

第1点目は，1918年に第一部に新設された直観科の実践報告である．『児童教育』には，この教科を担当したと思われる田中なおが「直観科の教材選択」「直観科に於ける寒暖計取扱の実際」という2つの直観科実践を報告している．このなかで田中は，直観科の趣旨として，「単に言葉の上のみの暗記」に陥りやすい弊害を避けるために「事実を事実として観察し具体的事物を直観する」こと，そして「観察力の養成」が必要であること，という2点をあげている[32]．さらに直観科における教材選択の基準としては，「児童が興味を有する教材」「児童の理解に適した材料」及び「自然物自然現象を主とし，これに日用品玩具の如き人工を加えたる教材」「郷土的教材」という4点をあげている[33]．しかしながらそこで説明されている「郷土的教材」の内容は，「適当なる公園，野原，山川，池」などであり，理科的教材が中心となっていることがわかる．また，田中の後任であった別所ハル（旧姓竹川）も，1923・24年の2年間だけではあるが，直観科の実践報告を発表している．しかしながら，そこで報告されている「直観教授・採集物の整理」「秋の直観教授」「秋草の直観」「初冬の直観材料」といった発表題目から推測すると，田中と同様に理科的な内容を中心に実践していたと思われる．

第2点目は，『児童教育』の1921年11月号に掲載されている「直観科教授の理科学習に対する影響の調査」[34]と題する調査報告である．この年は，1918年に入学した第一部の児童たちが4年生へと進級し，理科を学習することになった年度である．したがって，理科研究部によって行われたこの「理科テスト」に関する調査は，直観科を学習していない第二部や第三部の児童と比較して，第一部の児童だけが学んだ「直観科教授の効果」を測定しようとしたものと判断できる．調査報告の主旨をこのように捉えた場合，この調査報告は，直観科を「理科学習の下降」として把握していたと判断できる．なおこの調査について芳澤は，「観察の正確度」と「考察の記述」が約2倍以上にも及んでいる点に「直観科教授の効果」を認めている[35]．

第3点目は，『児童教育』の1921年7月号に掲載されている「直観科教授細目」[36]である．これは理科研究部によるものであるが，「堀七蔵（原案）」となっていることから考えると，堀が前年度に担当した第三部1学年の直観科実践に基づいて作成されたものと判断できる．この論文には，第三部における直観科の趣旨と教材選択の基準が説明されている．そこでは，直観科が「単に自然物及び自然現象だけでなく，人工物人事現象までをも包含する」ものであり，「歴史地理に関する事物現象も対象とする」ため，「当校の直観科は自然科と全く同一ではない．自然科の外に郷土科，市民科等の性質を帯びている」[37]と説明されている．そしてその題材としては，「児童の日常生活上最も卑近なもの」「容易に直観し得るもの」「児童の興味を感ずるもの」「直観材料の得易きもの」を選択し，それを「季節」「場所」を中心として「近きより遠き」「継続的観察の重視」という原則で排列したと述べられている．しかしながら，この論文に掲載されている題材を検討した場合，理科的な内容が中心となっており，「歴史地理に関する事物現象」としてあげられているのは，公園などの「学校近辺の校外観察」に限定されている．

第4点目は，1927年に発表された「各科教授要項」に記されている「市民的材料」という言葉である．そこでは直観科の説明として，「自然の事物現象・郷土の地理的事項・社会的市民的材料を取り扱う」[38]と記されている．もちろんこの要項には，詳細な説明や題材が記載されていないため，その内容を検討することはできないが，「社会的市民的材料」と表現されている点は注目される．なぜならば，1932年に発表された要項では，この表現が「文化的社会的ノ事象現象」[39]へと変更されているからである．

以上検討してきたように，『児童教育』に掲載されていた直観科実践と直観科教授要項を調べた場合，附小の直観科は「理科的内容の下降」という文脈で構想されていたと判断できる．しかしながら，21年と27年の要項には「市民科」「市民的材料」という文字が記載されており，この点に芳澤が考えていた「市民科」を軸とした直観科構想の影響が見られる．このように判断した場合，1921年に「堀七蔵原案」として発表された直観科教授細目に「郷土科・市民科」といった言葉が挿入されていたのは，堀の後任として直観科を担当し，理科研究部に所属していた芳澤の構想であったと思われる．

3）高畑の「直観科」構想

さて，『児童教育』誌に掲載された直観科実践を検討した場合，1926年度に発表された高畑くに江の報告が注目される[40]．この報告は第一部3学年の直観科について述べたものであるが，直観科の題材が「理科的材料と市民的材料」によって構成されており，それ以前に報告されている実践とは明らかに異なっているからである．そして，高畑は「市民的材料」の内容として，「見学」活動と「習慣的」な生活行事及び「社会の一員としての存在を自覚」させるための学校・家庭・町といった3項目をあげている．そこで，それらの項目の題材として取り上げられている内容を示すと，次の【資料4】の通りである[41]．

【資料4】　高畑くに江の「市民的材料」
(一)見学　(1)校内巡視　(2)湯島天神並びに神田明神参拝　(3)二重橋に行き宮城礼拝
(4)日比谷公園並びに上野公園　(5)東京駅並びに丸の内
(二)習慣的の催し　(1)ひな祭り　(2)七夕祭　(3)お月見
(三)社会の一員としての存在を自覚す　(1)自分の教室，自分の学校，自分の家，自分の町
(2)地球

こうした内容項目を見た場合，提示されている三つの「材料」が直観科における内容編成の枠

組みとなっていることがわかる．しかしながら，この「市民的材料」の内容については，実は知ることができない．なぜならば，論文の最後に「尚実際については他日に譲ることと致します」[42]と記述されているだけでなく，しかもこの報告を最後として，彼女は『児童教育』誌上から消えてしまうからである．では，こうした直観科構想を発表した高畑くに江とは，一体如何なる人物なのであろうか．彼女が『児童教育』誌上に発表している論文題目を検索したところ，発表年度が1925･26年度の2年間だけであり，しかもその報告内容が算術と理科に限定されているだけなく，直観科に関する報告は，この1件のみであった．

一方『お茶の水女子大学百年史』には，東京女子高等師範学校を卒業した学生のその後の生き方が紹介されており，その一人として「岩水クニエ（旧姓高畑，大正13年理科卒）」という人物が取り上げられている[43]．それによれば，彼女は1924年に同校を卒業した後，1927年から私立桜蔭学園中等部・高等部で数学を担当した教師であった．そして退職後，玉川大学の通信教育課程に入学し，1982年に「八十二歳大学生晴の卒業式」を迎えた人物として紹介されている．なお，『桜蔭会史』には「母校の訓導」に就任したことが紹介されており[44]，『続桜蔭会史』にも戦後になって桜蔭学園の教頭を勤めたことが記されていた[45]．したがってこれらの文献に登場している「岩水クニエ」は，明らかに，直観科構想を発表した「高畑くに江」と同一人物であると判断できる．

では東京女高師の「理科」を卒業し，わずか2年間しか附小に在職しなかった若い教師が，1926年度という時点で，なぜ「市民的材料」を組み込んだ直観科を構想し得たのであろうか．この言葉は彼女自身が独自に考え出した構想だったのだろうか，それとも前項で紹介した芳澤喜久の直観科構想に基づいているのであろうか．もちろん，高畑が附小に赴任したのは1925年4月であり，しかもそれが発表されたのは1927年1月であるため，25年5月から入院した芳澤との接点は，時間的にも見いだせない．しかしながら1924年2月に，当時女高師の4年生であった高畑は，附小の教育実習に参加していたはずである．理科専攻であった彼女は，教育実習で芳澤の指導を受け，その際に「市民的材料」という言葉を学んだのではあるまいか[46]．

以上検討してきたように，「社会の一員としての個人」の育成を目指していた芳澤喜久は，アメリカにおけるシビックスの考え方を取り入れることによって，「注入主義の理科教授のもたらす弊害」[47]を打開するだけでなく，児童の生活環境自体に対する研究的態度を育成しようと考えていた．そして彼が実践し構想した直観科は，郷土科・地理科とともに「市民科」の一部として検討されていたのである．こうした彼の教科構想は，小学校教育において，社会認識教育を目指した優れた教科構想となっていたことがわかる．諏訪郡で2年間の代用教員生活を送り，大正新教育の洗礼を受けた芳澤喜久は，この体験を基盤としながら，その構想案を実践によって具体化するとともに，そこから「市民科」構想を模索し続けていたのである．しかしながら彼の突然の急逝により，この構想は明らかにされることなく，附小においてさえも継承されてこなかったものと思われる．ただその痕跡は，直観科教授細目と高畑が発表した1つの実践記録にのみ，「市民的材料」という文字が微かに残されているだけである．

四 「市民科」から「社会科」へ

さて，1929年に新設された同校の「社会科」については，これまでその設置経緯はまったく解

明されていない．なぜならば『児童教育』だけでなく，同校から刊行されたあらゆる文献にも，その経緯が説明されていないからである．例えば，「社会科」に関する最初の論文である金成みき江の「社会科（郷土科）に対する一考察」[48]においては，『児童教育』の6月号に掲載された「教育の郷土化並に社会化に対する施設経営」を契機とした説明が行われており，当時の郷土教育運動の影響を受けて設置されたように見える．しかしながら，これまで検討してきた芳澤の「市民科」構想は，実は同校の「社会科」カリキュラムと驚くほど類似しているのである．もちろん，芳澤は1925年11月に死去しているため，両者の関連性は資料的には確認できない．しかしながら，両者の「接点」は本当に存在しないのであろうか．

1）社会科研究部の発足

金成論文では，その冒頭で「小学校教育に於ける郷土科社会科の特設は既に相当古くから主張せられており，且実験研究せられた問題である」[49]と述べられているが，『児童教育』の目次を検討してみても，この指摘に該当する論文を発見することはできない．金成は，「社会化」と「社会科」を単純に同一視していたのであろうか，それとも「相当古くから主張せられて」という一文には，何らかの意味が隠されているのであろうか．そこで『児童教育』の内容を再検討したところ，1926年4月号の「編集後記」に，実に興味深い問題が記載されていることが判明した．すなわち，当時附小に設置されていた地歴科研究部・修身研究部・国語研究部及び体育研究部などの紹介とともに，「自然科研究部，社会科研究部又児童の周囲の社会と自然とを教課（ママ）として児童を教育せんとの立場から，最も新味ある研究を進めつつあるが，その発表の教育界に貢献する所大なるは云うまでもなき事なり」[50]と記載されていたのである．したがってこの記述から，1926年度に「社会科研究部」が設置されたことがわかる．しかしながら『児童教育』誌には，この社会科研究部の活動はほとんど報告されていない[51]．

一方，自然科研究部の活動については，理科研究部による「自然研究の合理的指導」[52]と題する論文が掲載されている．そして，この「総論」部分を担当している吉田弘は，次のような構想を述べている[53]．すなわち，研究題目を選定するためには，教科書に掲載されている体系的な項目や伝統的方法を否定するとともに，「海の研究というので，海の事，海水の性質，海藻類，魚介類，潮の干満，波，食塩等あらゆる研究をなさしめ，川という題で流水の働き，岩石の研究，水草，魚類その他の水棲動物の研究をなさしめ，校庭の研究というので種々の植物や岩石，虫類などの研究をなさしめるが如き事である」と．こうした吉田の記述から，自然科研究部では，内容を体系的に整理し教授するのではなく，児童の生活を軸とした内容編成を模索していたことがわかる．自然科研究部の活動をこのように把握した場合，おそらく社会科研究部においても同様に，児童の生活経験を軸とした内容編成が検討されていたと思われる．

さて，この吉田弘と芳澤の関係については，北澤種一の海外留学にともなって附小主事代理に就任した堀七蔵が，その当時の様子を次のように述べている[54]．すなわち，「当時，附属小学校には，山形寛・五味義武・斉藤英夫・岩下吉衛・中野八十八・土屋敏雄・山内俊次・奥田兵治など古参訓導のほかに，大正十年四月に奉職した渋谷義夫（大正八年三月東京高師文科乙卒，大正十年三月東京高師修身教育専攻科卒）・吉田弘（大正八年三月東京高師理科第二部物理化学卒，滋賀県師範学校教諭二年），また芳澤喜久（大正十年三月東京高師理科第三部博物・地理科卒）など，新進の諸訓導がいて，それぞれ熱心に研究もするが，また相互に議論し合うことが盛んであったので，主事代理として，これらを統制することには相当骨が折れるありさまであった」と．この堀の文章から，吉田と芳澤及び渋谷義夫の三名が1921年に赴任したことがわかる．しかもこの三

名の訓導は，東京高等師範学校の卒業生であっただけでなく，中野区の同じ場所に住居を新築していたのである[55]．こうした人事から判断した場合，彼らは1920年の第三部改造にともなって，その実験教育を担う中核的な訓導として招聘されたものと判断できる．そして，専攻科を卒業し修身科を担当した渋谷を中心として，理科（自然科）を担当した吉田と，地理・直観科（市民科）を担当した芳澤は，学校内だけでなく校外でもその検討を行っていたと思われる．

2）芳澤喜久と「社会科」

前節で検討したように芳澤は，シビックスに基づいて，「市民科」を軸とした教科構成を構想していた．もちろん彼の論文には，「社会科」の記述は見られない．しかしながら社会科研究部の発足が1926年4月にまで遡ることが確認されると，彼の「市民科」と「社会科」の間には，何らかの接点が存在するように思われる．

1994年7月に行った調査の際，芳澤の生家の土蔵に，彼が当時読んでいた文献が保管されていることを教えていただいた．もちろん，彼が購入した書籍の多くはすでに分散されており，残されていた文献から彼の研究状況のすべてを推測することはできない．しかしながらそこには，数冊の外国語の文献が残されていた．そこで，残されていた文献と記載されていた購入年月日，及び文献に挿入されていた部分的な訳出と書き込みを手がかりにすると，彼の思索過程は以下のように推測できる．

第1点目は，コロンビア大学教員養成学部の『紀要』が残されていたことである[56]．この雑誌には「閲覧室」という所蔵印が押されていることから判断して，芳澤が購入したものではなく，附小で定期購読されていた雑誌であると思われる．同校では，北澤の前任の主事であった藤井利誉が海外留学しており，その際にホレースマンスクールのプロジェクト・メソッドに関心を抱いていたことが指摘されている[57]．おそらくこの雑誌は，それ以来学校で購入されていたものであり，その一冊を芳澤が借り出していたものと思われる．そしてこの雑誌には，ホレースマン・スクールの6学年を担当していたムーアの市民的資質教育に関する論文が掲載されている[58]．しかもこの論文には，多くのアンダーラインが施されていることから判断すると，彼がシビックスを検討した際に参考にした論文の一つであったと思われる．なお彼が発表した「シビックスと郷土地理」の執筆が「1922年1月」であったことを考えると，芳澤は1921年4月に赴任して以来，こうした雑誌を検討しながら，「市民科」を構想していたものと思われる．

第2点目は，ドイツの郷土科に関する文献が残されていたことである．特に『郷土科教授の原理』と題する文献には[59]，部分的な翻訳が添付されていただけでなく，「七月十日北澤先生御書よりお借せしもの」と記された紙片も挟み込まれていた．ここに記載された「七月」とは，北澤が1922年12月に海外留学に出発したことから判断すると，21年もしくは22年と推測できる．したがって芳澤は，北澤からドイツの郷土科を紹介された後，貸与された文献を訳出するとともに，自分自身でも郷土科関係の文献を購入し，検討していたと思われる[60]．

第3点目は，ブラノムの『地理教育』という文献が残されていたことである[61]．そしてこの文献には，その緒言の部分に「Social Studies」が紹介されており，しかもその部分にはアンダーラインだけでなく，欄外に書き込みが施されていた．この文献には，「1922年」という購入時期のサインが残されていることから判断すると，彼がアメリカの「Social Studies」に注目していたことが伺える．

以上の点から判断した場合，1921年4月に附小に赴任した芳澤喜久は，直観科の実践に携わる傍らで，北澤から紹介されたドイツの郷土科だけでなく，アメリカのシビックスや地理教育に関

する文献を読んでおり，それらを参考にしながら「市民科」を軸とした教科構想を抱いていたことになる．そしてその過程で，彼はアメリカの「Social Studies」にも着目していたのである．しかも，こうした文献が集中的に購入されたのは，1922年から24年にかけてであり，北澤の海外留学中のことであった．こうした研究状況から考えた場合，芳澤は帰国した北澤に，それまで検討してきた内容を報告したのではあるまいか．おそらくその時期は，北澤が帰国した1924年12月以降，そして彼が入院した25年5月以前であったと思われる．このように考えてきた場合，『児童教育』誌の1925年1月号に記載されていた芳澤の新年の「歓喜」には，結婚と長男の誕生といった家庭的な問題だけでなく，「市民科」から「Social Studies」へという研究上の抱負も含まれていたのではあるまいか．

3）芳澤喜久と北澤種一の関係

これまで検討してきたように，1926年4月に社会科研究部が発足していたこと（もちろんその活動状況は不明であるが），そしてそれ以前に芳澤がアメリカの「Social Studies」に着目していたことが判明したとき，同校の「社会科」については，なぜその発足の経緯が記されなかったのかという疑問が残る．1929年に新設された「社会科」の実践に際しては，その担当者であった鷲山さきは，北澤から指導を受けたことを述べていた[62]．さらに，「Social Studies」を「世間的教育」と翻訳して郷土科を実践した坂本豊も，北澤が講演などでは「社会科」を紹介していたと述べている[63]．しかしながら管見の限りでは，北澤が発表した文献及び論文には「社会科」に触れたものは存在しない．では，なぜ北澤は「社会科」の文字を残さなかったのであろうか．

年譜によれば，北澤種一は「諏訪郡四賀村」出身であり，長野県師範を経て東京高師へ入学し，そして同校を卒業後，福井師範教諭を経て附小に赴任している[64]．一方，芳澤喜久が生まれたのは「諏訪郡原村」であった．「四賀村」は，現在上諏訪市に編入されているが，地理的には，茅野市をはさんで「原村」と非常に近いのである．しかも芳澤は，諏訪中学から東京高師へ入学していた．そして彼が赴任した1921年は，北澤が附小主事となり，第三部を新教育の実験学級へと再編成した翌年のことであった．こうした両者の関係を見た場合，北澤はまさに「同郷の後輩」として芳澤に接したのではあるまいか．

このように検討してきた場合，「Social Studies」に最初に着目したのは北澤種一ではなく，おそらくシビックスを検討していた芳澤喜久であったと思われる．北澤は，芳澤からこのことを紹介され，低学年全体教育が開始された翌年になって（すなわち，芳澤喜久が死去した翌年），社会科研究部を発足させるとともに，高学年の教科課程を検討したものと思われる．1926年度に発足したはずの社会科研究部の活動がほとんど記録されていない背景には，芳澤喜久の急逝した影響が存在すると思われる．1929年に「社会科」を新設しながら，北澤種一が「社会科」に関する一切の記録を残さなかったのは，それが芳澤の構想だったからではあるまいか．そして，北澤が1933年に死去したことによって，同校の「社会科」発足の経緯は，歴史のなかに埋もれたものと思われる．

おわりに

東京女子高等師範学校附属小学校における教育研究活動は，1920年の北澤種一の主事就任にともなって，第三部を新教育の実験学級として改造するとともに，直観科を中心とした低学年教育

研究として開始された．そしてこの第三部における新設教科の担当者として招聘されたのが，芳澤喜久であった．彼は旧制諏訪中学を卒業した後，二年間の代用教員生活のなかで大正新教育の洗礼を受けたことを契機として，教育への道を志している．そして東京高等師範学校で地理博物を専攻した後，卒業と同時に附小に赴任し，前年度から始まった低学年の実験教育に携わることになったのである．こうしたなかで芳澤は，直観科を低学年のみの教科として限定するのではなく，4学年の郷土科及び高学年の地理科に連なる教育課程のもとで構想していた．それがシビックスを導入した「市民科」構想であった．彼はそのために，ドイツの郷土科教育やアメリカのシビックス及び地理教育を検討しており，そしてその過程で，アメリカの「Social Studies」に着目していたのである．しかしながら，4年間という極端に短い在職期間だっただけでなく直観科だけの実践という特殊性のために，彼の構想はまとまった形で発表されることなく，しかも1925年11月に死去したことによって，これまで埋もれてきたと思われる．

こうした芳澤喜久の思索過程を考えたとき，彼が構想した「市民科」とそしてその延長上に注目していた「Social Studies」は，海外思潮の単なる導入や受容ではなく，むしろ大正新教育の洗礼を受けた一人の教師が，その模索過程でたどり着いたものだったのではあるまいか．

註

1)『お茶の水女子大学百年史』お茶の水女子大学（1984）768-769頁．なおこの時，直観科が第二・三部にも設置されている．
2) 伏見猛弥『我国に於ける直観教授・郷土教育及合科教授』日獨書院（1935）207頁．
3) 伏見猛弥「我国に於ける合科教授」『教育思潮研究』第4巻第2輯（1936）239-240頁．
4) 吉田生「芳澤喜久君の長逝を悼む」『児童教育』20-1（1926年1月）162頁．なおほぼ同様の内容が次の雑誌にも掲載されている．地理教育研究会「同人芳澤喜久君の長逝を悼む」『地理教育』3-3（1926年1月）．
5) この点については，原小学校長小池春夫氏から，同校に保管されていた「中新田分教場学籍簿」に基づいてお教えいただいた．
6) 入学年については，次の文献で確認できた．なお中学入学までの間は，中新田分教場から本校である原小学校の高等科へ進学したと思われる．諏訪清陵高等学校同窓会『会員名簿』スワ・データーバンク（1986）44頁．
7) なお本郷小学校で閲覧した『長野県学事関係職員録（大正4年度）』と『長野県学事関係職員録（大正5年度）』，及び玉川小学校から発行されている『玉川小学校百年の歩み』によれば，立澤小の勤務が「大正4年」，玉川小が「大正5年」となっている．
8) 同校の規模は，彼が赴任した当時，学級数が14（高等科2学級を含む）で児童数が667名（高等科児童の71名を含む）となっている．『玉川学校教育百年の歩み』茅野市立玉川小学校（1973）20-21頁．
9) 長野県の若い教師たちが白樺派の影響を強く受けたことについては，次の文献で指摘されている．中野光『大正デモクラシーと教育（改訂増補版）』新評論（1990）26-30頁．
10)「島木赤彦年譜」『現代日本文学大系（39）』筑摩書房（1973）459-460頁．
11) 前掲書8）73頁．
12)『会員名簿（昭和59・60年）』茗渓会（1984）60頁．
13) 小林氏によれば，吉田の追悼文に記された『自然界の話』『動物の観察』『生き物の話』は，児童向けの読み物とのことであった．また同氏からは，喜久が在職中に遭遇した関東大震災の際に彼の身を案じて東京へ出かけたことや，夏休みや冬休みを利用して度々帰省したことなどをお教えいただいた．
14) 二葉生「新春雑感」『児童教育』19-1（1925年1月）128-9頁．
15) なお勇氏は，諏訪中学を卒業された後，東京の大泉師範学校に入学されている．前掲書6）190頁．
16) 斉藤英夫の地理教育論については，岩田一彦氏が「現代の社会科にも通用しうるような教授原理を採

用」していたと評価されている．岩田一彦「斉藤英夫の地人相関論の構造と実践―わが国地理教育史における地人相関論の研究―」『社会科研究』第36号（1988）12頁．

17）なおこの連載は彼の死後，斉藤英夫と佐藤保太郎によって継続されている．また同誌には，渋谷義夫が「紫双溪生」というペンネームでアメリカの地理教育の動向を紹介している．

18）次の7報告である．「[08] 直観の意義と其の実際」，「[26] 直観の審美的価値」，「[28] 直観教授の実際」，「[38] 尋常一年の直観教授」，「[40] 直観教授の実際・大豆の直観」，「[42] 直観教授の実際・天気の直観」，「[43] 直観教授の実際（尋三）」．

19）芳澤喜久「直観教授の実際」『児童教育』17-4（1923年2月）92-93頁．

20）芳澤喜久『自然と直観』中興館（1923）．なおこの文献は，熊本県男子師範学校時代に購入され，熊本大学図書館の旧書庫に保管されていた．

21）同上，239頁．

22）同上，2頁．

23）同上，92-93頁．

24）同上，240頁．

25）同上，331-367頁．

26）芳澤喜久「シビックスと郷土地理」『児童教育』16-3（1922年1月）73-74頁．

27）芳澤喜久「市民教育に対する私見」『児童教育』16-8（1922年6月）93頁．

28）芳澤喜久「地理といふ学科」『児童教育』16-4（1922年2月）30頁．

29）前掲書26）73頁．

30）芳澤喜久「ホーム・ジォーグラフィーとは」『児童教育』19-2（1925年2月）27頁．

31）前掲書2）207頁．

32）田中なお「直観科の教材選択」『児童教育』14-4（1920年2月）20頁．

33）同上，22-23頁．

34）理科研究部「直観科教授の理科学習に対する影響の検査」『児童教育』16-1（1921年11月）．

35）前掲書20）231-238頁．

36）理科研究部「直観科教授細目」15-10～12（1921年7月～9月）．

37）理科研究部「直観科教授細目（一）」15-10（1921年7月）2頁．

38）東京女子高等師範学校附属小学校「各科教授要項」『児童教育』21-8（1927年8月）．

39）低学年教育研究部「修正低学年教育に於ける直観題目系統案（1）」『児童教育』26-4（1932年4月）97頁．

40）高畑くに江「直観科について」『児童教育』21-1（1927年1月）．

41）同上，41頁．

42）同上，42頁．

43）前掲書1）264-265頁．なおこの部分は，朝日新聞（1982年3月3日）の要約である．

44）桜蔭会編『桜蔭会史』明和印刷（1940）928頁．

45）桜蔭会編『続桜蔭会史』文弘社（1975）182頁．

46）この推測については，1993年9月に問い合わせてみたところ，同年1月25日に93歳で死去されたため，確認することができなかった．長男岩水達夫氏よりの筆者宛の書簡（1993年9月15日付け）による．

47）前掲書20）141頁．

48）金成みき江「社会科（郷土科）に対する一考察」23-9（1929年9月号）．

49）同上，27頁．

50）余録子「お茶の水から」20-4（1926年4月号）154頁．

51）社会科研究部の活動は，「社会科」の設置以降になって，次の論文が1件のみ報告されている．社会科研究部「社会科実際指導の一記録」25-8（1931年8月）．

52）理科研究部「自然研究の合理的指導」『児童教育』20-6（1926年6月）．

53）同上，90頁．

54）堀七蔵『教員生活七十年』福村出版（1974）97頁．

55）小林氏によれば，三名で相談して土地を購入し，土地続きに家屋を新築している．

56）Teachers College of Columbia University, *Teachers College Record*, Vol.22, No.3, May 1921.

57）前掲書2）205-206頁．

58) Texa L. Moore, 'Teaching Citizenship in the Grades', *Teachers College Record*, Vol.22, No.3, May 1921.
59) Rudolf Hänsch, Paul Mückenberger, August Eöffler, Heinrich Schimpf, *Die Praxis des Heimatkundlichen Untrerrichts*, Leipzig, 1921.
60) 前掲書 59) に基づいて彼が購入した文献は次のものである．なお前者には，「1921 年 12 月」に購入されたことを示すサインが，そして後者には「1922 年 12 月」付けの領収書が添付されている．
Beorg Stark, *Prinzipien u.Methoden der Heimatkunde*, Schwabach, 1920.
Michael Haberlandt, *Die Bölker Europas und des Orients*, Leipzig, 1920.
61) Mendel E.Branom and Fred K.Branom, *The Teaching of Geography*, Boston, 1921.
なおこの文献について芳澤は，「地理科の本質」(『児童教育』18-13［1924 年 11 月］37-38 頁）において，地理教育の一般教育目標部分を引用しているが，「Social Studies」には触れていない．
62) 附小の「社会科」実践における北澤の関与については次の拙稿を参照されたい．「東京女高師附小における「社会科」実践の考察―題目に見られる授業観の受容と変容―」『社会科研究』第 41 号（1993）．
63) 筆者宛の私信（1993 年 10 月 2 日付）による．
64) 「北澤種一氏年譜」『児童教育』26-2（1932 年 2 月）40 頁．

【付 記】
芳澤喜久の調査に際しては，諏訪清陵高校を卒業された小平直行氏（熊本大学）と東京教育大学を卒業された横山勝三氏（熊本大学）から資料を貸与していただくとともに，貴重な助言をいただいた．また，芳澤喜久の実弟である小林繁治氏と実雄の長男である芳澤弘氏には，当時の様子をお教えいただくとともに，貴重な資料を貸与していただいた．さらに，突然の訪問であったにも関わらず，玉川小学校と本郷小学校及び原小学校の先生方には，貴重な資料を拝見させていただいた．また，諏訪清陵高校の卒業生である中村正英氏（原村役場）には，調査に際して多大なご協力をいただいた．記して感謝申し上げる次第である．なお本論文は，平成 7 年度科学研究費補助金(一般研究Ｃ：課題番号 06680262) による成果の一部である．

追記
本論文の脱稿後，小林繁治氏から芳澤喜久が購入していた，地理教育と直観科教育に関する英文文献 23 冊をお送りいただいた．これらの文献資料の解析については，別の機会に譲りたい．